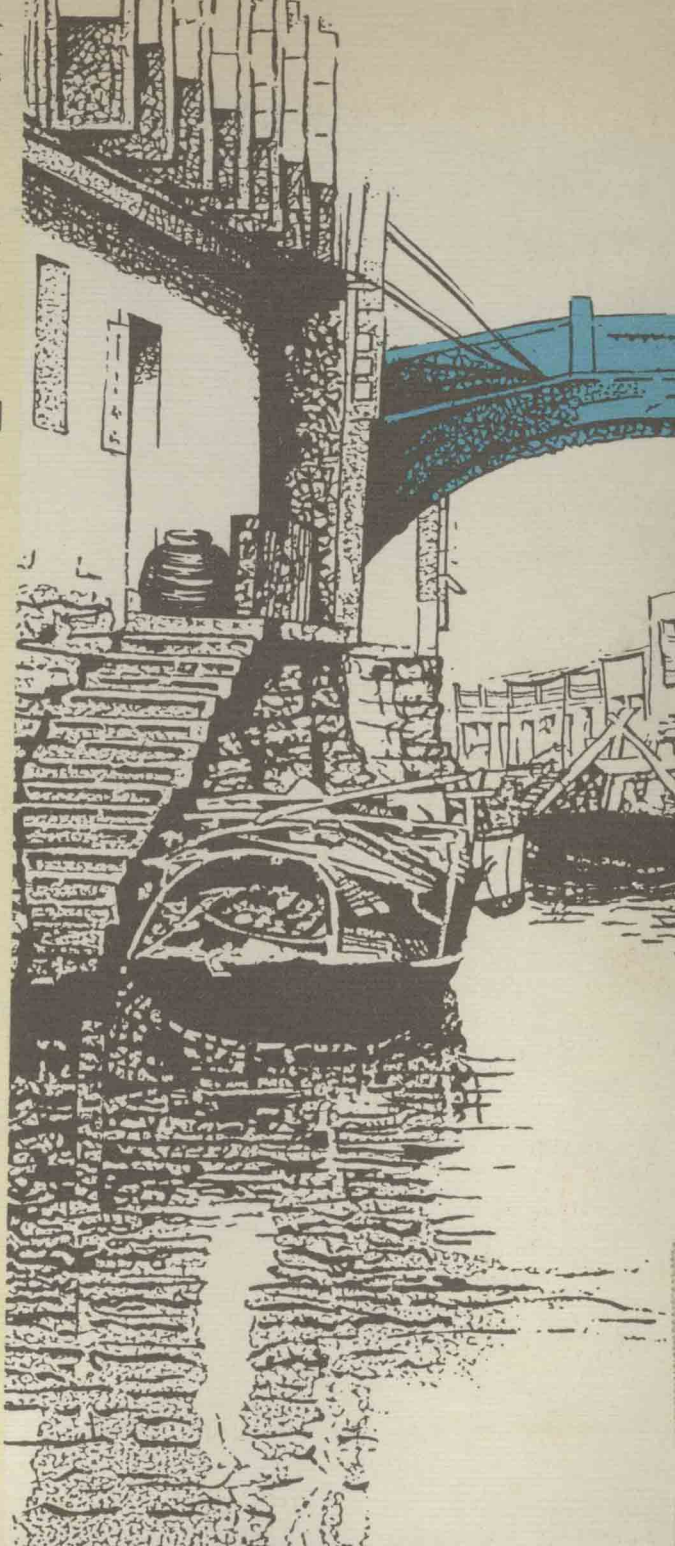
六月の話題

——鉄凝

年代中国女流文学選〔5〕

現代中国文学翻訳研究会・訳

南條純子・監修



80年代中国女流文学選（5）
六月の話題

一九八九年六月二十二日　初版発行

監　修　南條純子©

訳　現代中国文学翻訳研究会

発行者　長野祐治
発行所　株式会社 NGS
大阪市淀川区西中島一丁目十一―十六
住友商事淀川ビル五二三号室
電　話　〇六―三〇八―三二八一
振替口座（大阪）四―一三三二七

印刷　明新印刷株式会社
製本　株式会社小幡製本所

落丁、乱丁本はお取替いたします。
定価はカバー、帯に表示してあります。

六月の話題

現代中国文学翻訳研究会・訳
南條純子・監修

NGS

まえがき

一九八六年の十一月、80年代中国女流文学選シリーズ第一巻を出版して以来、いつしか二年半の歳月が流れ去り、ここに第五巻を完成させることができた。

八〇年代の最後の年に、当初予定していたシリーズを形の上で完成できたことにほっと一息つくと同時に、果たして第一巻から第五巻までに収めた短・中篇二十五の作品と三つの資料的文献で、八〇年代の中国女流文学を紹介できたかどうかについては疑問が残る。それは一つには、八〇年代とうたっているが、収めた作品は八七年までのもので八〇年代の全期間を収められていないこと（これは中国の出版事情にもより、活字になって手に入るのに一定の時間がかかる）。二つには、可能なかぎり時代を代表する作品を収めたつもりであるが、限られた紙数の中ではすべてを紹介することは不可能であり、またより優れた作品の見落としも免れないからである。

とはいえ、第一巻の〝まえがき〟で述べた「当翻訳研究会は八〇年代の中国文壇に花開いた女流作家の作品を選りすぐって翻訳し、その翻訳を通して、現代化のもとで発展

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

していく中国の社会と人間を理解する一助に資することができれば幸いだと考えている」との目的は、不十分ながらも、果たすことができたと考えている。

〝愛〟をテーマにした第一巻『錯、錯、錯！』、〝文革〟をテーマにした第二巻『終着駅』、〝若者〟をテーマにした第三巻『ラブレター』、〝働く女〟をテーマにした第四巻『四人の四十女』に続く第五巻は、社会の矛盾を反映した〝世相〟をテーマにした作品六篇と八〇年代の中国文学を概観する示唆に富んだ論文二篇を収めた。

『六月の話題』（原題『六月的話題』）の作者・鉄凝（ティエニン）は本シリーズ第二巻に『果樹園への小路』で登場している文革世代の代表的作家の一人で、この世代の著名な作家――王安憶・張抗抗・張辛欣などが先輩格の諶容・張潔などとともに円熟化に向かっているように、この作家の筆もますます冴えてきている。本作品は、現在大きな社会問題の一つになっている指導幹部の腐敗現象に焦点をあて、権力を指向する人間と権力に弱い大衆の微妙な心理を軽快なタッチで短篇にまとめあげたもので、八四年度全国優秀短篇小説賞を受賞した。

『白衣の天使』（原題『白衣仙女』）は作者・航鷹（ハンイン）の八二年の作品で、マンションに居住する社会各層の人間ドラマを生き生きとユーモラスに描写することを通して、物質文明を必死に追求する庶民の現実の姿を見事に典型化し、その中に鋭い社会批判をつきつけている。この作家の、そのペンネームと同様に男っぽい簡潔な文体は魅力的である。

『シャンゼリゼ大通りの家』（原題『香樹麗舎大街的房子』）の作者・陳吉蓉（チェンチーロン）は、前述の文革世代作家までを既存作家とすれば、それに続く劉索拉・残雪・劉西鴻などとともに台頭してきた新人作家の一人で、この作品は、開放政策のもとで一気に過熱化した若者の海外脱出志向に対して、意外な結末を配してやさしく警告を発している。八四年の作品である。

『回春条例』（原題『減去十歳』）は、現代中国の代表的女流作家として不動の地位を占めている諶容（チェンロン）の作品。この作家も本シリーズ第一巻に『錯、錯、錯！』と『決して面白くない自伝』ですでに登場している。本作品は表題から奇抜で、内容も異色のものであるが、非現実的課題をいかにも現実のことのように読者を作品の中に引き込んでいく筆力はさすがで、諷刺的な笑いの中に共感を呼ぶのは、文革で失われた十年が各世代に遺した傷が余りにも深刻であるからだろう。『決して面白くない自伝』との併読をおすすめしたい。本作品は八五～八六年度全国優秀短篇小説賞を受賞した。

『男と男の間』（原題『男人之間』）は作者・苗月（ミャオユエ）の八六年の作品で、サブタイトルに〝新時代の三世同堂〟とあるように、経済改革と開放政策がかつての大家族制度の権力構造を変化させていく過程と新旧世代の矛盾・対立の描写を通して、現代化とともに核家族化していく方向が読みとれる。

『素人のど自慢』（原題『唱』）は作者・包川（パオチュワン）の八七年の作品である。普通の地図にさ

えその名が書かれていない、時代おくれの風に、ふわりふわりと流されていた小さな県城が徐々に現代化の波に洗われていく動きが、〝素人のど自慢〟大会を通して自己を再発見し、生活を変革していく人々の動きとあわせて描き出されている。

ところで、八〇年代の中国文学はどのような特徴をもっているのか。この問いに対しては、巻末に訳出した作家・劉心武の論文「ここ十年の中国文学のいくつかの特徴」が、深い示唆を与えてくれる。ここでは、文革について文学の立場から斬新で革新的な分析をおこない、文革後の十年（八〇年代）の文学の発展を回顧し、今後の方向を展望している。作者は、中国の文学・藝術界が追求しているのはいかなる文化であるのかということについて、それは、「（世界文明との）交流と（毅然とした）変革の願望に満ちた」「いまだ何と名付けていいか分からない中国の新文化である」と規定し、この新文化の発展のために「現在中国文壇が必要とするのは、単純な肯定や否定ではなく、なおのこと、人為的な整理や一元化ではなく、高度な学術水準の分析研究と百家争鳴の自由な討論であり、十分な時間と忍耐強さをもって斬新な中国文学の成熟をうながし、待つことである」と指摘している。

また、中国の当代文学がかかえている主要な危機ということにふれて、「それは、世界文学との交流と文学の変革を果敢に実行する開放的改革的な人文環境が（客観的にも

主観的にも）持続的に充分に受け入れられるか否かにある」とし、このことがまた今後の中国文学の成熟を保障するカギであると主張している。

言葉を変えて言えば、中国文学が世界の文学に通じる普遍性を体現していくには、かつての「政治に奉仕する」文学との完全な訣別と、思想・言論の完全な自由が保障されなければならない、ということではないだろうか。しかし、八〇年代の中国文学を見てきて感じることは、基本的には開放的改革的な方向が堅持されているとはいえ、これを保障する基盤はまだしっかりとは確立されておらず、「百家争鳴」「百花斉放」が提唱されたかと思うと、反ブルジョア自由化・反精神汚染キャンペーンが張られるといったぐあいに、依然として「放」（自由化）と「収」（統制）の政治的コントロールから自由でありえない。この、文学以外の要素の介入とどのように闘い、それを排除していくかという課題は、今後もなお中国の文学者の肩に重くのしかかっていくであろう。

同じく巻末に紹介したもう一つの論文・董静如の「新時期〝女流文学〟の魅力」は、もはや文壇では軽視できない大きな力となっている新時期の女流作家群に焦点をあて、新時期の女流作家がこのように目覚ましい成果をあげた理由を、歴史的必然性、社会性、文学伝統の継承と文学それ自体の具体的な条件などの観点から分析したもので、本シリーズに収めた女流作家とその作品を理解する一助になるであろう。

また今回は、中国の文学や民族学で、大きな業績を残してこられた国立民族学博物館

名誉教授の君島久子氏より、本シリーズの完成を記念して、特に一文を寄せていただいたことは、当翻訳研究会にとって大きな激励であり、深く謝意を表するものです。

最後に、本シリーズの完成に変わらぬご支援と熱い励ましをいただいた先輩、友人、読者の皆さん、そして㈱NGSの長野社長、樋口女史のご尽力に対して研究会を代表して心からお礼を申し上げます。

一九八九年五月

南條純子

もくじ

まえがき――3
六月の話題――鉄凝 11
白衣の天使――航鷹 25
シャンゼリゼ大通りの家――陳吉蓉 69
回春条令――諶容 89
男と男の間――苗月 129
素人のど自慢――包川 159
ここ十年の中国文学のいくつかの特徴――劉心武 193
新時期〝女流文学〟の魅力――董静如 203
発刊によせて――211

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

六月の話題

鉄　凝

◉作者略歴

鉄凝（ティエニン）

一九五七年、北京に生まれる。原籍は河北省。父は画家、母は音楽家で四歳のとき北京から保定に帰る。

七〇年（十三歳）中学に入り、芸術的雰囲気の家庭で大量の内外文学名著を読む。文革の混乱期であったため、基礎教育の不足を自らの努力で克服した文革世代作家の一人である。

七五年（十八歳）中国共産党に加入。同年高校卒業後、志願して河北省の農業生産隊に入り、余暇に児童小説や短篇小説十余篇を発表した。

七八年（二十一歳）保定市文学芸術連合会へ転任、専業創作に従事。

七九年（二十二歳）中国作家協会河北分会に加入。

八二年（二十五歳）中国作家協会に加入。

現在（三十二歳）中国作家協会保定分会理事。河北青年連合会委員。雑誌『花山』の編集にあたる。

【主な作品】

『帰去』（八一年河北短篇小説賞）『哦、香雪』（八二年全国優秀短篇小説賞）『没有鈕扣的紅襯衫』（八四年全国優秀中篇小説賞、『紅い服の少女』という題で映画化された）などの受賞作のほかに中篇『夜路』（七八年）『村路帯我回家』（八三年）短篇『小路伸向果園』（八〇年、本シリーズ第二巻に収める）『閏七月』『晩鐘』（八七年）長篇『玫瑰門』（八八年）などがある。本書の『六月の話題』（原題『六月的話題』）は八四年全国優秀短篇小説賞受賞作である。

一九八三年五月二日、省の新聞の第一面右下の隅に、編集者の言葉を添えた読者からの一通の投書が載った。それは、S市文化局の四人の局長が現代劇の合同公演に乗じて大がかりな不正をしたことを暴露したものであった。その中で触れられていることはそれほど衝撃的な問題ではなかったが、編集者の論調は大へん真剣で、とことんまで突き詰めようとする意気込みがあった。

投書者の署名は、S市文化局・莫雨（モーユイ）とあった。

S市文化局の受付にいる達（ター）さんがその日の新聞を各事務室に送りとどけると、局内ではかなりの騒ぎが起こらずには済まなかった。

局内には莫雨という人物はいない。現在いないだけでなく、これまでにもいなかったのである。そのことは達さんが誰よりもよく知っている。ところが投書者の莫雨は、まるでその場に居合わせたかのように当時のすべてを知っている。某局長は夫人と子女を連れてホテルに何日泊まったとか、某局長は公演の切符を横流しして私腹を肥やしたとか、某局長は物見遊山に車を使ったとか、また某局長は何度かタダ食いをしたということまですっぱ抜いているのである。

すぐさま省の方から調査班が派遣されてきた。局長連は調べを受けただけでなく、〝鉄の如き事実〟の前に、〝国家のうまい汁を吸った〟分を身銭を切って弁償させ

られた。

一件落着して局内は表面的には静かになった。しかし廊下、階段、食堂、便所など人の出入りする場所ではどこでも、一種の重苦しいざわつきが感じられ、果ては椅子ひとつ魔法瓶ひとつまでが互いにひそひそと、莫雨(モーユィ)って誰のことだ、誰が莫雨なんだと尋ね合っているように感じられた。

もちろん莫雨とは仮名である。この点では達(ター)さんはほかの人ほど馬鹿ではない。解放前、彼は都市で党の地下連絡員をやったことがあるから、仮名というのが非常の時に重要な意味をもつことを普通の人よりよく分かっている。

一九八三年六月二日、達さんは新聞社から莫雨あての送金為替を受け取った。〝受取人への通信欄〟には、千字当り十二元の計算で二十四元の原稿料と注記してある。これは達さんの月給の半分にあたる。慣例に従えば、達さんは為替を受け取ったら、小さな黒板に「誰それは為替を受け取りに来られたし」と書かなければならない。それから為替を受付のガラスの窓口にもたせかけ、受取人が取りに来るのを待つのである。ところがこの日、郵便配達員からそれを受け取ると、彼はちょっと考えて、素早く鍵付きの引き出しの中へしまいこんだ。カチッと音がして鍵がかかると、達さんは注意深くあたりを見回したが、受付室には彼一人しかいない。とんでもない

ことをしたこのときに、誰もいないとはありがたいことであった。

夜、達さんはベッドでしきりに寝返りをうった。最初目の前に現われた莫雨なるものは、運転手の大劉（ターリウ）だった。大劉は局内で一年間臨時雇いをやっていたが、口のきかたや仕事のしかたには臨時雇い特有の従順さや控え目なところがなく、いつも大声でわめきちらす。女房の悪口と自分の腕前を吹聴するばかりで、まるで自分はこの世でいちばん不幸な亭主であり、また最高の運転手であると言わんばかりである。少し前に彼は解雇されている。あの合同公演のとき、彼は最初から最後まで局長たちの運転手をつとめた。運転手の目や耳にかなう者はいない。お偉方が車中で交わすよもやま話でも、かけねなしに第一級のネタとなりうるのだ。

達さんはまた寝返りをうった。次に現れた莫雨は、財務科長の杜彦栄（トーイエンロン）だ。最近太りはじめた気のいい中年女性だ。帳簿上のことなら彼女がいちばん詳しい。おそらくそれが原因でか、少し前に、ある劇団の会計に転勤させられた。合同公演のときの支出はすべて記帳されていたのだから、彼女はなんでも知っているはずだ。

達さんはまた寝返りをうった。またもや目の前に莫雨が現われた。局保健室の魯（ルー）医師だ。彼もあの公演にかり出されて仕事をした。魯医師を軽く見てはいけない。注射や薬の調合を知っているだけではない。彼の所から伝わってくる面白いうわさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com